草刈善造

新自然文明への挑戦

●阿寒学園村建設序論

1、新自然に生きる　2、人間・この勉強を要するもの　3、新らしい価値体系を求めて　4、「健」文化生活の創造とキブツ　5、新自然学園村の建設

1、新自然に生きる

昭和十四年九月、北支・蒙古の旅を終えて帰国する興亜学生勤労報国隊を乗せた船は、濁水の黄海を過ぎ九州北辺に近づきつつあった。黄塵万丈の大陸で緑と水に飢えた一ヵ月余の生活であっただけに、今、眼前に展開し始めた故国の島々は、碧海の中に神秘的な緑の美しさを湛えて迫ってくる。〈正に神ながら神産み給う山紫水明の祖国日本〉といった感激に、しばらくは満たされつづけていた。やがて神戸上陸、サービスされた水の美味しさ。内蒙のオルドス地帯で小豆色の泥水をこして飲んだ身には、水晶水とでも形容するほかはなかった。

昭和二十年、敗戦による国土の破壊にもかかわらず〈緑の山河〉は残り、蘇る春と共に息ずいていた。しかし、以来、四半世紀、戦争日本から経済日本へと転換した祖国は恐るべき公害工場へと化しつつある。かつて山部赤人が「田子の浦ゆ　うち出て見れば真白にぞ　富士の高嶺に雪は降りける」と万葉に詠じたその田子の浦は、今はヘドロの悪臭鼻をつく醜悪無比の反自然汚海に一変した。美しい自然と厚い人情を期待して来日する外人も排泄物に埋もれ汚濁する山河に強いショックを受け、ロベール・ギランをして「日本人は美醜の観念を失ってしまったのか」と首をかしげさせるほどである。

だが、このような感慨を、科学技術文明に対する反動から生れる原始的自然（以下、原自然と呼ぶ）への懐古趣味的郷愁と混同されてはたまらない。それどころか私自身、原自然の荒涼たる岩山や砂漠、悪疫はびこる沼地や荒野を開拓し、人間と動植物が平和に共存できる新天地へと変えつつあるイスラエルや中国の国づくりには、深い感銘をおぼえずにはいられないのである。自然に恵まれた人間が自然を粗末に破壊し、自然に恵まれない人たちが自然を大切に育成する。このパラドックスは、のがれられない人間の宿命なのであろうか。

ともあれ、原自然にただ屈従、順応するのではなく、といっていたずらにこれに反逆を試み、それから隔絶する反自然でもなく、それに適応して万物共存の道を創造するところに、新自然に生きる人間の進路を見いだすほかはあるまい。この三つの自然の連環構造について、前述の巨視的な外部的人間環境とは対照的な、微視的、内部的人間環境としての食物、特に多年試みてきた玄米食の実践を通して、もっと詳細に考察してみたい。

ルソーの〈自然に還れ〉を文字通り原自然に復帰することだとしたら、それは不可能であり、そこに人間存在はありえないであろう。猿でさえ除去する籾殻、その籾のままの原米を鶏と違う人間が食べることは、どうみても無理である。さらに籾殻を除いた玄米も生のままでは（粉にしても）食べるのにかなりの努力がいる。やはり煮て食べることが最適のようである。このことは明らかに非原自然ではあるが、反自然、不自然だとはきめつけられないであろう。むしろ以下に述べるような観点から、白米の不自然さに比べて最も自然に即応しているが、しかも原自然のままでないとしたら、これをどのように呼ぶべきであろうか。第二次自然または人間的自然として、旧（原）自然に対して新自然と名ずけたい。

玄米が含有するバランスのとれた栄養素（蛋白質、脂肪、含水炭素、ビタミン、ミネラルなど）が、白米化によって分離、除去された後は、これを完全に復元する調理は第一級の栄養士といえども不可能であろう。精妙な原

自然の栄養分を魚肉野菜その他でもって万一カバーしうると理論的に仮定しても、実際にはこれを摂取する側の人間の嗜好が働き、偏食、アンバランスとなることはさけがたい。しかも、不自然食がもたらす問題はこれにとどまらない。インスタント化した白米食は玄米食に比べて噛むことを余り必要としなくなる。その結果は必然に唾液の分泌不足、歯力の低下、歯ぐきの弱化、顔面筋肉運動（血液循環）の不活発によって鼻、耳、眼（さらに極論すれば脳髄など）の機能障害がもたらされがちである。一方、胃腸の消化、吸収作用も円滑を欠くばかりでなく、腸の蠕動運動を刺戟する物質の不足から排泄活動が不十分となり、放射能や農薬などの毒素の停滞はさけられない。これを人工的に解決しようとして不自然な下剤を用いれば、便秘と医薬との相互悪循環はさらに助長されるだろう。

人間の健康条件は複雑で各種の要因がからみ合うから、玄米食か白米食かの差異だけですべてを律するわけにいかないが、反自然と新自然との関係を限定して考察したまでである。むしろ、問題は次の課題に移される。すなわち、それが健康によいとわかっていてもまたそれを習慣化してゆけば人工化されない食物本来の味を楽しみうるとしても、玄米食の実践には、その開始に当たっても継続することにおいても、しばらくの間はかなりの意識的努力を要求されるということである。原自然や反自然は特別な人間的努力を必要としない、どちらかといえば単純、安易な道であるが、新自然は当初において特に決断を要する新しい開拓、創造である。人間の生命にとって最も重大な食物摂取の在り方の中に、実は人間存在が、従って人間の文明が端的に象徴されていると考えられるが、人間は果たしてこのような新自然に生きるほかはないものかどうか、もっと根本的に考察してみよう。

2、人間・この勉強を要するもの

急激な自然破壊と表裏する加速度的な反自然文明の進行に直面する時、「未来を見る目を失い、現実に先んずるすべてを忘れた人間。そのゆきつく先は自然の破壊だ」といったA・シュバイツァーの言葉や、「科学技術というものは方法と手段は鋭いが、目的と価値には盲目である」と述懐するA・アインシュタインの言葉の響きは重い。自然科学の独走と、人間科学の甚だしい遅れから生ずるギャップが何をもたらすかについて、A・カレルはその著『人間・この未知なるもの』の中で早くから次のように指摘していた。「科学が試みた環境の改造は人間に有害である。なぜならば、それは人間の本質を全く知らずになされたからである」と。この警告はL・カーソンのサイレント・スプリング（邦訳『生と死の妙薬』）を待つまでもなく、既に恐るべき現実と化しつつあったのである。

そもそも自然とは何か。同時に一体人間とは何か。とても簡単に答えられる課題ではなく、あるいは永遠の謎かもしれないが、人類の連帯責任において検討を要するところの、文明の一大転換期に当面していることも争えない。人間をどうとらえるべきであろうか。

『宇宙における人間の地位』（M・シェラー）
『自然における人間の位置』（T・H・ハックスレイ）『人間の問題』（M・ブーバー）
『現象としての人間』（T・ド・シャルダン）

など、すぐれた数多くの人間研究に学ぶところも多い。しかし、人間を意識的、精神的存在として他の生物から峻別する人間観よりも、最近の生態学が明らかにしつつあるように、人間を自然の一環として考える生物学的発想

にむしろ魅きつけられるものがある。

人間を純粋に発生的に動物界からはみ出し、そこから離脱した動物として、人間は動物の一変種であり、かつ〈大地の病気〉すなわち〈まだ確立していない動物〉とみるF・ニーチェの人間観は極めて示唆的である。なぜ、なんのために、いつ頃からそうなったかを今日の人類学はまだ明らかにしてくれないが、四足這行の安定動物から二足（直立）歩行の不安定動物へと転換したところに、人間存在の宿命の一切がかけられているように考えられる。従って「人間・この不安定なるもの—病めるもの」という反自然性と共に、「人間・この安定を求めるもの——健なるもの」としての新自然性が同時に、非原自然（非動物）性として発生、要求せられることになる。

直立による前肢（両手）の大地からの解放は、ホモ・ファーベル（工作人）の誕生となり、最も高い位置に坐することとなって発達し始めた脳髄が、頸筋のゆるみによる声帯の微妙な進化がもたらした言語の発生と相補循環してホモ・サピエンス（知性人）およびホモ・ロックェンス（言語人）の出現へと連環していく。それは明らかに動物界からの逸脱として、一線を画する驚異的な人間文明創造への原動力となったことは否定できない。しかし、重くなった大脳を支えるために湾曲し易い背柱は、内臓諸器管を圧迫して呼吸、循環、消化、排泄の諸作用に、デリケートな影響を及ぼし始めることになる。一方、直立による重心の不安定さを象徴するかのように、知性人としての複雑な精神作用（苦悩）がこれに相乗積的に影響を加え、原自然の動物にみられない反（不）自然の病的生活へ転落する危機にさらされることになる。ホモ・パティエンス（苦悩人）はホモ・サピエンスとなるためにさけられない高価な代償となった。

しかし、非原自然は必ずしも反（不）自然に直結するものではない。既に玄米食の実例でみたように、原自然に適応（順応ではない）する新自然生活を開発、創造することによって、原自然に優るとも劣らない健康を保持、増進、洗練することも不可能ではない。自然と人間との一体観にたつ東洋医学では、例えば西医学健康法によれば、この新自然原理に基づき、身体をとりまく外部的自然（大気、大地、日光、水など）との調和、および新自然食（玄米、黒パン、牛乳、生野菜、海草、小魚、果物、蜂蜜、酪農食、柿の葉茶など）の摂取による内部的自然の保持を通して、全く医薬を用いず血液循環と排泄作用を促進する生活療法（生活革新）によって治病と保健に驚くべき効果をあげているが、私自身もそれを体験、実証することができた。

ここでも本質的な問題は、新自然を工夫、創造して健康に生きる以外に道のない人間であるにもかかわらず、反自然的享楽生活への誘惑は極めて強く、そこからもたらされる生理的不調（病気）にも、不自然なインスタント方式（副作用を伴なう医薬）によって安易に対処しがちな人間性の一面をどのように考えるか、ということである。人間のみの、しかも一部の者のみの快楽生活を支えるために他の動植物、自然および他の人間がどれほど犠牲となり、搾取されているのかということである。このことは自然と人間、人間と人間との一体連環（連帯循環）の事実をどう自覚するかという生き方の問題、自然の中における人間存在の意義と役割の問題へと発展する。人間（労働者）の場合はその搾取に対してはストライキを以て闘うこともできようが、動植物の場合は無言の消滅によって、人類の生活を危殆に導くことになる。その声なき声に耳を傾け、限度をこえた不必要な殺傷をさけしかも人類に近い、苦痛感を伴なう生物の殺

害はできるかぎり抑制されるべきではないのか。人類に近い生物ほど食物栄養、消化からみてインスタントであり、自然食（生食、全食）から遠ざかるために、人体の本質的健康には必ずしも好影響を与えないという考え方もある。

「世界全体が幸福にならないかぎり、個人の幸福はありえない」といった宮沢賢次は、屠殺実習を機によびさまされて菜食主義者となった。またキブツの労働哲学に大きな影響を与え、「人間と自然」に関する深い謙虚な考察者であったA・D・ゴルドンも菜食主義者であった。彼が生活したキブツ・デガニアを訪ねた時、その感化を受けた菜食主義者が何名かいることを知らされたものである。菜食主義にまで徹底できないとしても、人間はもっともっと自己を抑制して生きるべきではないのか。原自然から逸脱する自由をえた人間に、自制の論理と倫理が欠落するとき、他の生物の基本的生存権を無視して自己の基本的人権のみをふりかざすことや、まして人格の尊厳を誇りうる根拠は完全に消失してしまうのではなかろうか。

北海道の東部、浜中町の無人島（ケンボキ島）に一家をあげて移住し、動物と共に生活しつつ研究を進めている動物生態学者の畑正憲氏は次のようにいっている。「だれが考えても、この地球上で人類だけが生存できるわけがない。にも拘わらず破壊が進行するのは一木一草をいとおしむ心が欠けているからである。地球上の自然という見地から考えれば文明をもった人間は異質の存在である。それだけにもっと謙虚におずおずと住まねばならぬ。控え目でありすぎることはないのではなかろうか」と。人間だけの快適さを求める無制限の消費は美徳どころか、恐るべき罪悪といわねばならない。自然空間をいたずらに破壊しつくし、逆に人間疎外をひき起こす反自然都市の膨張はもう許されない。自然を損傷汚染してかえりみない凄まじい人間心理は転移して、他の人間を殺傷することをいとわない麻痺した心情をつくり出し、原子戦争をまたずとも、局地戦争、交通事故、公害、その他の無責任な人災によっておびただしい人命がそこなわれつつある。

「朝顔につるべ取られて貰い水」（加賀の千代）といった優にやさしい東洋的、日本的心情は地を払い、ブーバーのいうように他の生命を「なんじ（二人称）」とみることができず、「それ（三人称）」と見下し、自己の目的達成の手段と化してしまう。この驚くべき生命軽視の風潮は、非原自然に生きられる自由に対する代償としての責任感（反自然・不自然へ転落しがちな人間欲求に対する制御力）の戦慄すべき欠除を意味する。V・E・フランクルが「人間であることの最も深い究極的な意味は責任をもっているということである」というとき、未曾有の無責任時代がまさしく未曾有の人間喪失時代と表裏して出現していることを痛感させられる。

しかし、この責任遂行のために自己の欲望をコントロールすることはなま易しいものではない。不自然へ向かう慣性はかなり強いから、これを抑制（禁絶ではない）して人間的自然（新自然）を確立するためには、絶えざる修練によって強い意志力、決断力、実践力が養われなくてはならない。いや、むしろ人間とは、その抑制そのものの中に開現するともいえるのではないのか。ガンジーは「自制を行なうかぎりにおいてのみ人間である」といったが、孔子も「己にかちて礼にかえるを仁（人）となす」と述べている。

ところで、このような自制力、意志力の育成は、幼少期から集団的に一貫して遂行されるならば、必ずしも困難ではなく、むしろ容易であるとさえいいうる。時実利彦氏の大脳生理の研究やA・ポルトマンの生理的早産説は、人間の子どもの早期における教育的可塑性と効果を示唆して余りある。「幼き日に自己を抑制することを学ばなかった人間は不幸である」というI・カントの言葉はこれを裏づけるものであろう。零才からの最早期の集団教育の成果については、キブツの実績が示すように、ホモ・サピエンスをこえてY・メッシンガーのいわゆる〈ホモ・コオペランス（協同人）〉の実現が期待されるところまできている。

このような自制心の修練は、いうまでもなく子どもの健康を保持、洗練していくことを通して具現化するもので、抽象的なお説教や訓戒によって達成されるものではない。A・アルキンの「子どもは幼い時、強い意志の土台である克己への長い苦しい道へ大人の指導のもとにふみ出すのであるが、それは生理的要求をきちんと果たし、清潔を守り、文化衛生的行為の初歩的な心得を実行する習慣をつけるところから始まる」という指摘は正しい。このような幼少期における生理的健康の基礎の上にのみ心理的（精神的）健康がきずかれるというべきであろう。偏食をさけてバランスのとれた食物を摂取することにより、意志的精神力、忍耐心の生理的基礎である副腎皮質ホルモンの分泌が促進されるが、逆にがまんして努力することによって、副腎皮質ホルモンの働きが活発化する。

いづれにしても、自然的人間が人間的人間となるために支払われなければならない代償は、新自然としての健康へ向けての努力であり、自己を勉め強いることである。「健」という文字は「人が建つ」ことを意味するが、四足動物から直立人（ホモ・エレクトウス）への転換が人間の建設を象徴し、しかも高くなった重心を安定させバランスを保持するために、驚くべき努力が無意識に払われていることは興味深い。易の乾の卦（け）に「天行健なり、君子以て自強して息（や）まず」とある。健なる大自然の法則に適応して生きるためには、反自然への誘惑に堕しがちな自己を新自然へ向けて強制することになるが、その勉めて止まない態度の中にまた病むこともない（おのづから健康も宿る）のである、というほどの意味である。したがって、人間とは勉強の中に存在するものであり、勉強の停止と共に人間もまた停滞することになろう。「人間・この健なるもの」とは「人間・この勉強を要するもの」にほかならない。

3、新らしい価値体系を求めて

「人間・この勉強を要するもの」という人間観が指向するところは、なぜ、なんのため勉強するのか、という人生観・生きがい論へと発展する。科学技術の驚異的進展と経済の高度成長を謳歌した人類も、特に日本における公害問題を契機として、現代文明に対する不信感がその心を支配しはじめたことは否定できない。真に人間に適する文明とは何なのか。人間としてのものの考え方、生き方が根元から問い直され、突きつめられていくと、生きがいの問題は結局、価値（目的）観の問題に帰着し、二度とくり返せない人生を、何に価値を見いだし、いかに生きてゆくかということになるであろう。

日本における価値観の混乱は敗戦の日に始まり、その後四半世紀を経て新らしい価値体系の確立が求められつつも、まだ国民的合意に達してはいない。価値観に関するかぎり、むしろ百花斉放、それぞれ異なる価値観を相互に尊重しあうことが大切で、一致を求める

ことは有害であるという考え方もある。しかし、日本というよりも全人類的規模で新らしい文明への一大転換期を迎えつつある現代、一見多彩な価値観にも、その基底に共通するいわば〈価値の原点〉ともいうべきものが考えられるが、それまでも否定する必要はないであろう。それどころか、そのような基底価値をぬきにしては、「病める文明」からの脱出を求める一切の試みは徒労に帰しかねないであろう。

ところで、そのような原点価値とは具体的にどのようなものなのか。既に前節において或る程度ふれてきたところであるが、ここではそれを体系化し、構造的に考察してみなければならない。公害により自然も人間も急速に蝕まれいく「病める文明」の禍中にあって人びとの胸底に潜在しつつも、しだいに顕在化してきた基本的共通価値とは何であろうか。

東京（大都市）集中に象徴される都市中心主義文明を支配する価値は、権を求める立身出世主義、利を求める科学技術主義、富を求めての経済主義などによって代表される。しかし、このような相対的手段価値が、結局、健を犠牲として教育・学問・文化・生活を歪め退廃に導きつつあることは、漸く大衆的レベルでの反省となりつつある。健康を害し、病弱、死滅化の道をたどるようでは、どれほど地位、名誉、利便、財産に恵まれようともそれを生きがいとするわけにはいかないという反省は、極めて平凡な素朴な万人の悟りであり、それ故にまた貴重な価値感である。

ヤマギシイズムの提唱者であった山岸巳代蔵は、その幸福論において「死の瞬間を最も幸福にしたい」と述べているが、死が幸せであるためには、健康の連続の後に到来する自然的老衰の〈眠るがごとき大往生〉でなくてはなるまい。本人も周囲の者も苦痛と悲惨さを全く感じない、壮厳な落日にも比べられる晩年であり最期でありたいものである。だが病める文明が病める人間を激増させつつあることは疑えない。昨年十二月の厚生省の国民健康調査によれば、人口千人当りの有病率が逐年増加して遂に九三・六人、すなわち国民十人に一人は病気、受療率の向上を差引いても生活環境の悪化は争われないと分析している。特に子どもの体力、健康がそこなわれつつあることは早くから指摘されていたとはいえ、保健体育審議会の中間報告（昨年六月）では、〈見かけ倒しの体力〉として男子十七才女子十四才で老化現象の訪れがみられるという指摘は重大である。『人間であるために』の著書R・デュボスは「結局、世界人口の半分が、医師、看護婦ないし精神医となって、他の半分の人たちの病気とノイローゼの治療に当たらねばならなくなるだろう」という驚くべき警告を与えている。

天道（自然）と人道（人間）との関係をぎりぎりの境地まで実践的につきつめて考えぬいた二宮尊徳は「飯と汁　木綿着物は身をたすく　その余（よ）はわれを攻むるのみなり」と歌っているが、無くても済まされる不要不急の装飾価値（権・富・利など）に幻惑されることなく、人間に不可欠な根元（基底）価値としての健（身体的価値であり同時に精神的価値となる）に還り、何はさておいてもこれを確保しないことには、人間存在それ自体が危機におちいることになる。最も平凡ではあるが最も重要な中核価値をなすこの「健」については、国連の世界保健機構（W・H・O）が定めた健康の定義が、最も的確にそのことを示してくれる。すなわち「健康とは肉体的、精神的ならびに社会的に完全に良好な存在状態であって、単に病や弱さがないというだけに止まらない」ということである。従来も「心身ともに健康な国民の育成」（教育

基本法、第一条教育目的）というように、精神的にも良い状態に健康の概念を用いていたが、これを社会的に良好な状態にまで拡大した考え方に注目したい。

新らしい価値体系を希求するものにとって、この考え方は極めて示唆的である。キブツ・ラマトヨハナンの故メッシンガー教授は、キブツの教育を説明する時「健康な社会における健康な人格の育成」を強調していたが、その健康な社会とは、単に人間的、文化的環境が健全であるということにとどまらないで、それらをとりまく自然的、物理的環境もまた至健であることを意味していたようである。人間と自然との連環構造をグローバルに考えさせられる今日では、〈健康な地球における健康な人類〉ということになるだろう。

「健康」の概念がここまで拡大深化されてくると、それは単に基礎的価値にとどまるものではなく、究極的な目的価値ともなり、さらにそこへ到達するための手段価値をも包含するものとなる。尊徳の歌に「米草は　根も米なれば茎も米　枝も葉も米　花も実も米」とあるが、生命あるものの真相は、始めも終りも途中も徹頭徹尾一貫するのが自然である。したがって、全人類、全生物、万物に充実、滲透する包括的な価値体系が求められなくてはならないとしたら、まさしく「天行健なり」で「健」価値の貫流においてであろう。しかもそれは人間的努力（勤労と責任）に裏づけられて実存しうることは当然の前提であろう。

新らしい価値体系の中核にこのような健が据えられるとき、従来、目的（絶対）価値と考えられてきた真（学問的価値）善（道徳的価値）美（芸術的価値）聖（宗教的価値）などは、どのような位置を占めることになるのであろうか。本来、健（ヘルスhealth）は語源的に全（ホールwhole）に由来するから、WHOの定義で健康を「完全に良好な存在状態」ということは、実は同義反復にすぎないともいえる。すなわち、完全（一物の残存、欠落もないこと）であることは、それがそのまま善（ぜん・良いこと）ではないのか。全生命、万物の完全なる状態が健康であり、それを道徳的に見れば「善」なる状態なのであろう。宗教的価値とされる聖（ホーリィネスholiness）もまた全（ホール）に由来するようである。一人、一物の不幸もなく全部を救い上げるためには、自己の地位、財産、名誉、さらに家族（妻子）からさえも、全てから解放され、身心ともに清々として一視同仁、その慈悲と愛は一木一草にまで及ぶことになる。J・デューイはグッド（good善）であることがゴッド（god神）であるといったが、善も神（聖）も同じ健（全）に対する視座の差異からの別名にすぎないと考えられる。

このことはまた真と美の価値についても同様である。自然科学のめざすところは、自然界の法則、宇宙の真理の探究であろう。自然科学（地質学、古生物学）者であるシャルダンが、重力圏、岩石圏、水成圏、大気圏、生物圏から構成される地球の構造に精神圏を加えざるをえなくなったように、研究が精密化するにつれて、特に最近の生態学の進歩によって、人間と自然との深い関係、万物の精妙無類の連関構造が明らかにされつつある。北海道林業試験場の三浦研究員の三十年にわたる研究成果は「内陸部の森林の荒廃がニシン不漁の最大の原因である」という、正に「木によって魚を求める」ユニークなものである。学問研究は、このような一見無関係のように考えられる自然界の神秘な連環体系を究め、より精微な真理を開示し、それが一大生命体であることをますます明らかにしてくれるであろう。「生命は歩々新生にして歩々完結であり、生きているとは循環していることであ

る」（西晋一郎）といわれるが、大自然にみる四季の循環、人体にみる血液の循環など、すべて滞りなく周流充実、一点のすきもなく一刻の停止もない。そこに自然、全人一体の真理・真実がよみとられる。この連環の理を別にして真理があろうとも思われない。

この連環一体の状況は至健、至康というべきであろうが、その停滞、弛緩は不健、病死となる。健なる姿、事実を真とするが、逆に真理に外れた反自然に健康はありえない。その生き生きした連環（健康）のリズムと姿態が視聴覚を通して内心の生命のリズムに共鳴感応するときに「こころよし（快美）」となる。真理・真実だから美しいのである。病的美というものは病める文明がつくり出し、病める感覚・心理に呼応する虚構の美であり、真実の美から程遠い、むしろ真実の美を混迷に導くものであろう。

「生きがい」すなわち「生きるかい」「生きている価値」とは、このような生命の真実としての健康、健価値が、あたかもプリズムを通過する太陽光線の七彩化するように、真・善・美・聖・愛・和・仁と映ずるところの、人間の〈崇高本能〉（山岸巳代蔵）を満足させることのできる生活、「健康で文化的な最低限度の生活」（憲法第二十五条）ではなく最適限度の生活を意味するものとなるだろう。

4、「健」文化生活の創造とキブツ

以上のような世界観（自然観）、人間観、価値感に貫ぬかれる健康で文化的な最適生活の具体的な存在様式は、どのような構造形態を呈することになるであろうか。それは過去の宗教がおちいった単なる微視的な人間（精神）革命に終わるものでもなく、また逆に体制さえ変革すれば理想は直ちに実現するかのような幻想にかられる、巨視的な社会（政治）革命で以て満足するものでもない。それは最も困難かもしれないが、具体的な人間の生活（産業と文化）の存在体系そのものの変革に向かうものである。いわば、文化革命であり生活の大革新であろう。革命の焦点は現象的には、病める文明の牙城である都市に向けられるが、本質的には、健康な文明の象徴となる新らしい文化農村の建設に集中される。

前述の畑正憲氏は次のようにつづける。「学問をもち出すまでもなく、自然の大切さはだれにでも分かっているはずだ。だがそれを守れないのは、くどいようだが、自然と隔絶した空間に住みすぎて、他の生命への共感を失ったせいである。　この失地を回復するには、子どもの心に生きとし生けるものをいつくしむ大いなる愛をはぐくむほかはない。と同時に、どうにかして、自然との絶縁空間である都市を改造する必要も生じてくる……生きものすべてが繁栄する時、健全なる生存環境を人類が取り戻すといえよう」と。少なくとも次のことはいいうるであろう。「健」価値文化生活を身心ともに蝕む罪と病の巣窟、〈夜の文化〉を象徴する現在の、特に日本の大都市（過密）生活の中に求めることは至難であろう。東京の改造に何十兆の巨費が投じられても、人口集中の悪循環をくり返すにすぎないだろう。といって、逆に今日の農村（過疎）生活の中にも、直ちにえられるものではない。「地（自然）と血（人間）を離れて文化なし」といわれるように、原自然生活に傾く農業・農村と、反自然（人為）生活に偏する商工業・都市とを最も適切に結合・調和・連環させるところに、われわれの希求する新らしい方向が発見されるであろう。

すでにマルクスやエンゲルスも「農業と工業との経営を結合すること、都市と農村の区別を漸々に廃すること」（『共産党宣言』）「この革命はいかなる発展過程を辿るか……工業と農業とを兼営し、都会的ならびに地方的生活の利益を一致せしめ」（『共産主義とは何か』）と指摘している。ユニークな最終戦争史観にたち、今日人類が当面しつつある歴史的大転換期の到来を早くから正確に推定していた石原莞爾は、搾取と戦争のない人類次代文化、新自然文明を創造する方途を、さらに徹底して次の三原則に要約、体系化している。

(1)都市解体　(2)農工一体　(3)簡素生活

彼の基本路線は国民皆農であるが、それは必然に都市生活を否定し、一部の人間と地域に局限される文化の都市集中は文化の本質に反すると同時に、現代文化自体の中に都市解体の可能性が生まれ、交通・通信・情報網の驚異的進展によって、現代文化はもはや都市を必要としなくなりつつあると考える。このことは、逆に現在の都市生活の長所が全国土に普及し、産業・教育・文化の諸施設も地方に分散して、僻地は自然に解消することを意味する。

さらに、彼は都市解体も農工一体も簡素生活の実践なしには不可能であるとして「この大勢を可能にするには、我々の生活様式が百八十度の転向を遂げねばならぬ。近代の文化生活と言われるものは自然を征服して人為的となり、人間は自然を離れて却って自然に逆襲される有様となった。この方向を突き進めば人類は滅亡する外はない。我々は舵を転じて新時代の簡素生活を創造しなければならない」（『われらの世界観』）と述べ、田園爽明の清純高雅な生活〈朝の文明〉が新らしく人類の郷愁をそそることを見ぬいている。簡素生活とは要素的（本質的）なものを簡（選）んで営むところの、正しい意味における最高文化生活を意味する。ガンジーは「簡素な生活に高尚な思想を」といったが、一木一草の中にも天地の生命、無限の情趣を味わい、乏しさの中にも豊かさを見いだしうる、量よりも質に生きる生活即芸術こそは、日本民族が歴史的に醸成してきた誇るべき新自然文化であったはずである。石原は同書の中で、簡素生活の積極的意義を論じ「自然と人為を完全に調和し、真に人類の生命を永遠ならしめる生活、科学と芸術とが渾然融合した生活である。科学は複雑な自然の中に簡単な法則を探り、芸術は森羅万象の中に単純直截な生命を把握しようとする。その本質はいづれも簡素なものでなければならない。人類の真の生命は簡素生活によってのみ無限の生長を期待することができる」といい、スフィンクスの謎とされる〈人頭獅身（神心獣体）〉が人間生活の理想であるが、そのような剛健な身体も今後の社会を支配する協同精神にみちた謙虚な人格も、科学技術による計器依存で失われた直観力（勘）の回復も、簡素生活を通してはじめて実現されることを力説している。

自ら東北（山形県）の僻村に生活しつつ、石原は敗戦を天が日本民族に与えた総反省の絶好のチャンスとして、死去の日まで、この卓抜な三原則実現の文化運動に全力を傾注したが、その理想はささやかな農村工社の実験として東北の一隅に胎動しつつある段階にすぎない。だが、この理想の巨視的規模における雄大な実験は、中国において人民公社網として結実しつつあるし、イスラエルにおいてはやや微視的とはいえ、既に六十余年の歴史と二百六十集団約十万人の社会的規模をもつキブツにおいて結晶し、国家社会に広く深く根づきダイナミックな前進をつづけている。いろいろな発想にたつ日本各地の共同体も、この方向を辿るものと推察されるが、社会的勢力となるまでにはなおかなりの期間を要するだろう。

キブツが「病める文明」から脱出し「健康な文化」の建設を志向する貴重なモデル的実験となったことは、その成立の経緯にからむ政治的、民族的な事情を考慮したとしても疑問の余地はないであろう。それは一般的に、都市から離れた辺境ないし農村に分散しているにもかかわらず、都市水準をしのぐ高い文化生活を維持しうる（H・D・ドラブキン著『もう一つの社会キブツ』）ということである。これは正しく一大公園文化農村であり、農工一体総合村であり、学園（教育）村である。高度民主主義社会であり、新らしい拡大家族でもある。しかも、それを可能ならしめたものは、ホモ・コオペランス（協同人）の自覚に基づく完全協同化であったことはいうまでもない。新自然文明へ挑戦した最も大胆な試みであり、歴史上はじめての、ブーバーによれば〈失敗しなかった実験〉である。「健」価値体系にたつ新らしい文明を希求する人間に、それは大きな激励と勇気を与えるものである。

しかし、開放社会であるキブツは、欧米から流入する「病める文明」に蝕まれる危険にも常にさらされている。特に最近はげしい工業化の動きは「人間と自然との契約」にめざめ、自然と土との生命的な結びつきに生きるゴルドニズムのキブツ哲学を崩壊に導きかねない。キブツがこの危機をいかに乗りこえて安定した農工一体の新文明を確立しうるかは最も注目されるところである。少なくとも工業社会につきまとう公害（環境汚染）の問題にはどのように対処しているのか、キブツ・ダンのJ・アラジイ氏からの回答は次のようである。「あなたの公式化した〈新自然（New Nature）〉は合言葉とならなければならない。あなたの求めるように、キブツは国の農村地帯にあって、その方向をめざしていると考えられる。キブツにおける工業化の増大にもかかわらず、とつけ加えておきたい。工業がもたらす、特に大気汚染などの問題は、キブツの普通の下水汚物や工場の汚物も排除する下水パイプの最先端にある酸化処理池によってさけられるし、今までもさけてきている。もう一つの除去法は、非常に高度の空気浄化能力をもつ特殊な樹木、かん木、その他の植物をキブツのキャンパスに植樹することである。高湿度による大気汚染は、過密人口を緩和することによって防がれる。キブツの建設や既存のキブツの拡大にも、このような過密人口の集中をさけることが最善の解決ではないだろうか。これらすべては、キブツが必要な衛生設備と満足すべき生活水準に基礎をおき、工業のような非常に都市的な性格をもつ農村協同体であるという事実に基づくものである。最後に、多くの点に照して、キブツは〈新自然〉に向けて最善の成功をおさめて前進するであろうということは明らかである」（一九七一年二月の来信）と。

このように、キブツは「健」文明を志向する創設の基本精神を崩すことなく、しかも変貌する現実社会から隔絶することもなく、都市文明の長所は積極的に消化、吸収しつつ、極めてダイナミックな進展を今後もつづけるだろうし、つづけてほしいものだと切望せずにはいられない。

5、新自然学園村の建設

キブツに代表される新自然文明の建設は、美しい人間生活の夢物語りや、イスラエル建国にからむ特産物として片付けられてよい時代ではない。人類の文明が、全生物が幸福（健康）に生き永らえるためには、否応なく取組まなければならない至上命令として迫られつつある。核戦争の脅威に直面してB・ラッセルが、人類の協力のみが破滅を救う唯一の道であることを強調してやまなかったように、地球汚染・自然破壊の恐るべき進行に当面しつつある今日、人類相互の協力はもちろんとして、人類と他の生物との協同、共存はさけることを許されない必然の絶対課題である。聖賢たちの教えが組織的に地球的規模で活かされ、実践されなければ、人間は自己の命脈を自身の手によって断つことが明らかとなってきたのである。

戦争日本から一転して経済日本となった、〈東海の小島〉は、皮肉にも公害・不健康・反自然文明のモデル国家と化し、「真理と平和を希求する」憲法も教育基本法も〈泣きぬれて蟹と〉共に横ばい、後退をはじめている。驚くべき堕落であるが、戦争に徹底し、経済に徹底した日本は、最後に懺悔道としての、健康と文化に徹底する教育日本として蘇生することによって、みずからの命運を開拓すると共に、他民族に与えた傷痕をいやし、不信を回復しなければならぬのではないか。公害問題を契機として、日本の資本主義経済体制の中にも、大きな反省と新文明を志向する胎動が感じられ始めたことも事実である。中国訪問に当たり、都市集中と高度機械文明によって壁に突き当たった資本主義を打開するために、産業や文化の地方分散、農工一体の中国の国づくりに期待し「これは新しいルネッサンスであり、現代の人類にとっての新らしい挑戦ではないかと思うのです。私は経済人というより一人の人間として〈病める文明〉の救いを求めてみたいと思います」という木川田東電会長（経済同友会代表幹事）の言葉はその一つである。建設省の人口　産業の地方分散計画、文部省の〈緑の学校〉や〈青少年自然の村〉の唱道なども、都市中心主義的発想から抜け切ったものではなく、臨時応急対策的な色合いが強いが、恒久本質的な新自然文明への一転機として軽かすことは不可能ではなかろう。

「過密都市には住みたくないが、住まなければ生きてゆけない。自然に恵まれた農山村には住みたいのだが、そこでは暮してゆけないのだ」という悲痛な投書の声をまともに受けとめる政治を待望してやまないのだが、政策の貧困をなげき体制の非を鳴らしているだけでは、問題は生産的な進行をはじめない。それを不毛の抽象論や空虚な怒号と化せしめないためには、巨視的な政治・経済・社会体制への挑戦と微視的な人間性への挑戦を、同時に可能ならしめる具体的な生活の現実場面であるコミュニティー（地域社会・村・集団など）から着手することが最も効果的であろう。キブツ・デガニアの創設以来、キブツの建設方式を支配した着実、地道な〈実現の原理〉（Y・メッシンガー）はこの意味において、また最も鋭い方法原理であったことを忘れてはならない。新文明を志向する政策を発動せしめずにはおかないような、主体的、自発的な協同体建設運動を困難な条件下にもねばり強く推進し、建設実績を以て訴えつつ、さらに促進していくことが必要であろう。日本各地に発生した協同体が、協同体連合として結集しつつある動向は注目に値するが、それは量的にも質的にも、もっともっと増加・拡大・向上を必要とすることはいうまでもない。

量・質ともに、日本列島中の最大の過疎地である北海道は、新らしい文化と新らしい人間、その新らしいコミュニティー建設にとって、歴史的にも常に実験地の使命を引き受けてきている。幕末に堀利熙が入植による新らしい日本人の形成を夢みてから、戦後、英国の詩人ブランデンが同じく新らしい型の日本

人の出現を予言して去るに至るまで、社会と時代の変革期に当って北海道はいつでも、新らしい人間と文化の開拓・創造の天地として注視を浴びてきた。明治維新には失業した士族たちが酷寒の原野に挑み、関東大震災を契機として都市生活に訣別した人も多く、例えば、根釧原野の奥地に新文化生活を求めて入植した長谷川光二氏夫妻、また太平洋戦争末期、空襲の激化による疎開として、さらに敗戦後全国を襲った食糧難打開のための入植、最近の環境破壊に伴なう新らしい人間生活の研究のための畑正憲氏一家の移住、あるいは先代以来数十年にわたる阿寒原始林の保護のために永住をきめた前田光子氏など、数多の動機と数多の試みが北海道を舞台としてくり広げられてきている。戦後生れた協同体もその全てが成功しているわけではないが、北斗農場、黎明農場、ヤマギシズム北海道試験場、三好農園、オホーツク牧場、協栄農場など約百に近い。

既述のカレルが「人間の再建」の章の中で「外部環境からくる化学的ないし物理的動因は、周知の如く組織と精神に著しい変化を与えうるものである。人間を抵抗力の強い剛胆な人物にするには、山地の長い冬、焼けつくような炎暑と万物が氷りつくような酷寒のこもごもやってくる国、冷たい霧と乏しい日光を特色とし、土地が貧寒で岩沢山であるような地方を利用すべきである」ともいい、また「一言でいうなら、北欧地方では普通であるような気象の暴虐にさらされている人間では、精神上の気力と、神経の平衡と、肉体の抵抗力とが増大するのである」と述べているが、人類歴史上、約一万年前の新石器時代にも匹敵するといわれる大転換期の今日（K・E・ボールディング『近代経済の終焉』）北海道がそのような新らしい人間、新らしい北方文化、新らしい福祉社会建設の基地として、またその実験に生きがいを感ずる青少年たちがエネルギーを協力集注できる新天地として再び見直されてもよいのではなかろうか。私自身もまた敗戦後、真日本教育建設の悲願をいだき、新文明建設の一拠点をつくるべく、根釧原野に阿寒学園村の夢を描いて以来早くも二十余年、実現の方法原理もほぼ確立し、残すところは具体的実践の問題のみとなった。その構想を素描してみれば次のようになる。

㈠場処　阿寒国立公園地帯の雄渾な大自然の霊気を浴びて広がる根釧原野の一角、畑地と牧草地、できれば森や林をもち、川や湖に近く、開拓生産の可能性に富むところで三〇〇～五〇〇ヘクタールの面積をもつところ

㈡環境形態　一大公園文化（教育）農村で、人間と自然の村（または人間・自然学校）として次の三つの村に展開する。①老人（成年）の村または健康・長寿の学校②青年の村（セミナー・ハウス）または農工・スポーツ・研究の学校③子どもの村または自然（緑・動植物）の学校

㈢産業　①農場では乳牛・鶏・蜂・魚などの飼育、自給飼料（牧草）・野菜・茸・花・果物などの栽培および植林②工場では酪農製品を中心とする農水産加工、純正食品製造、製材・木工および公害のおそれなき時計その他のスイス式精密工業③その他（観光・輸送・保健などの諸事業）

㈣施設　①生活のための宿舎（子ども・青年たちはアパート式協同住宅）・協同食堂（大集会室）・協同衣料洗濯場・協同浴場・理容室・医療（健康）室・日用品販売室など②文化活動のための事務所・研修室・客室・講堂（体育館）・グランド・図書館（博物館・美術館）など、いづれも冬季の防寒保温に特に留意した亜寒帯方式を工夫する。

㈤人口　①産業の発展によって収容人口に増減は生ずるが、約二〇〇人内外（内労働人口は男女合わせて一〇〇人内外）

㈥経費　①土地の取得、初期の基本的施設・設備などに要する財源は、建設の趣旨に共鳴する組織、団体（財団）篤志家からの援助にまつか、国、道などの公共低利資金によるほかはない。②基地建設後は産業収益によって漸次自給できる体制をとる。

㈦建設順序　①最大の課題は初期の創設に当るメンバー（男女合わせて数十名）の同志的結束であるが、新文明の開拓創造に感激をもつ青年を主体として参加者を募集し、長期の合宿研修を通じて同志的先駆者としての心身の資格条件を整備する。②参加決定者によって建設構想および計画は再検討され、その策定はメンバー総意の自主的決定に委ねられる。③その後の運営の一切はすべて参加者全員の「はなしあい」を通じて行なわれる。

以上の素描は現段階において私自身の脳裡に去来する閃きの一部にすぎない。提案なしには論議も始めようがないので、一つのたたき台として述べてみただけである。「健」価値体系にたつ新自然文明の創造という世界観の基本点においてのみ一致すれば、その方法論はダイナミックな変化と発展をみせることがむしろ望ましいであろう。いな、その基本哲学すらもさらに再吟味できる柔軟さを自己に課したい思いである。

ともかく国土全体のわずか一・七三％のところに、総人口の約五四％が密集するということは、どうみても不自然である。日本列島の約八〇％を占める山地へ向けて日本民族の移動・疎開が敢行され、自然空間が回復されないことには、どう都市を改造してみても、〈病める文明〉は〈死の文明〉への進行をやめないであろう。山地にあっても都市以上の健康な文化生活が可能である実例の実現を、一応、阿寒学園村の名称に託したまでで、その適地は列島の山地全体に広がる。大雪山学園村・日本アルプス学園村・阿蘇学園村等々かつて神社・仏閣が建設され修道の道場となったところや、今日僻地（過疎地）教育に苦しみつつあるところは、すべて新自然文明生活の最適地として生かされる日を待望しつつ。

ワークキャンプ運動短信

ワークキャンプ運動は全体に低調といわれながらも、着実な活動が育ってきているようである。ただし、渡り鳥的に社会福祉施設で短期キャンプを単発的にくりかえすという傾向が減り、一定の地域に入りこみ持続的に何かを創り出してゆく活動が増えてきている。たとえば、SCIはここ数年山梨県の金峰開拓農場にかかわっているが最近そのとり組みを深めてきている。FIWC関東でも渋川青年の家づくりが続いている。また、本誌で何回か紹介した岡山県の備北共同体建設のためにもワークキャンプがくり返されている。FIWC関西では奈良の大倭紫陽花邑にある交流の家を根拠地としながら、らい患者の施設や養護施設などにねばり強いかかわりをしている。彼らの有志が鳥取の私都（きさいち）でおこなっている試みも一種の根拠地づくりらしい。

こうしたさまざまな試みが、今までの限界をのりこえる新たな地平をきりひらきつつあるらしいのは心強いことである。